慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	矢口孝次郎著 イギリス帝国主義史論
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.4 (1943. 4) ,p.369(105)- 372(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19430401-0105
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430401-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

要は日本經濟の今後の進展方向に則しつゝ、大東亞經濟再建の具體化のための眞の指標ともなり得べき南方資源研究が、理論的にも實證的にも促進せられねばならない。それは一方において、既往の內外諸研究への反省・檢討並びにそのこれまでの成果の利用と他方において現地事情の精密なる實狀調査の推進との結合の上に導かるべき事は、敢て指摘するまでもないであらう。この目的のために國內諸研究調査機關の統一的指導を背景として、智囊の總動員が要請せられる所以である。

〔附記〕本稿は三月下旬に執筆したものであるが、編輯の都合により掲載が遲れた。それ以後の刊行物に關し校正の際を利用して、加筆する豫定にしてゐた處、生憎病氣の爲、その機を逸した。後日適當な折に補正したい意向である。

矢口孝次郎著　イギリス帝國主義史論

加田哲二

「彼を知り己を知れば百戰して危からず。彼を知らずして己を知れば一勝一負す。彼を知らず、己を知らざれば戰ふ毎に必ず殆し」。

この孫子の言葉は、周知のことに屬してゐる。戰爭といふ事態に直面して、第一に必要なことは、わが戰鬪的精神を高揚することであり、かつこの戰鬪的精神を實體化する戰備を整へるにあることはいふまでもない。それは戰力の增强である。戰力の增强は敵を打倒するにある。而して、敵打倒の最も近道ともすべき點は、敵の最弱點をつくことである。そのためには、まづわれと敵とをともに知らねばならない。

わが現在の敵國は米英である。わが國は既に太平洋領域における米英の根據地を奪つて、敵のわれに對する攻擊據點を覆滅せしめた。しかもなほかれらは、われに反攻を企圖しようとしてゐる。われわれは、かれに對する敵愾心を高揚して敵に對する積極的攻勢とのが防禦を形成しなければならない。

このときに當つて、われわれ學徒としては、敵米英の本質を知り、それとわが國の使命とを比較考量することによつて、今次の戰爭の高い意義を了解し、ますます君國に報ずる途を講ぜねばならぬ。

東亜に對して第一にして最大の侵略者として現はれたものは、イギリスである。このイギリスの正體こそ、舊世界秩序そのものであり、アメリカ合衆國は、いまそれを相續しようとしてゐるものである。從つて、われわれは、まづ敵を知る資料としてイギリスを知ることも、一つの手段である。この資料として、わたくしは、こゝに關西大學教授矢口孝次郎氏の「イギリス帝國主義史論」（昭和十八年三月甲文堂書店）を紹介しよう。

矢口氏は、次のやうに結論してゐる。

「イギリス帝國の始源はエリザベス朝にあると言ふ――然し一六〇三年、女王が世を去る時には、まだイギリスの海外領土と稱すべきものは一箇所もなく、海外に於いてイギリスの國旗の下にある一人のイギリス人も存在しなかつた。

然るにそれから二世紀半の後――ディルクはイギリス領土を旅行した後次の如く廣言した。「余の全旅程を通じ余の伴侶となり指導者となつた觀念は、わが民族が、そのいきほいに於いて、如何に旺んであるかと言ふ考へであつた。それは全世界を圍繞し、遂には世界に充つるであらう」と。更にまた世界各地に帝國を建設したイギリス民族を如何なる事件と雖も阻止することは出來ないと稱して、アングロ・サクソンの世界支配を誇示したのである。

それから、七十年の後――ジュージ六世の治下においては、イギリス帝國は、五大陸に亙つて、地表の四分の一を領有し、そこには五億の人口がその統治の下にあつた。

それから――現在においては、その帝國は崩壞に向ひつゝあるのである。それが如何なるかたちをとりつゝあるかは吾々の眼前に示されてゐる・・・・」（三二一―三二二頁）

イギリス帝國は、ヨーロッパにおけるグレート・ブリテン島をいふのみでなく、廣く世界に散在するイギリス領土を併せての稱呼であることは、明白であるが、さういふイギリス帝國が、ヨーロッパ外の存在である點については、わが國の識者もあまり注意してゐないのではないかと思ふ。イギリスの持つ世界帝國をヨーロッパ外的存在として把握するものに、わが國においては、先きに、「歴史的國家の理念」（昭和十六年十二月刊）の著者鈴木成高氏がある。

鈴木氏のこの著作は第一部を「世界史と大英帝國」と題し、大英帝國の性格と構造、および大英帝國の成立と崩壞とを論じてゐる。イギリス帝國の性格を知らうとする人にとつては、事實に基いて歴史哲學的論策として、充分に利益を享けつゝ讀み得るものである。

矢口氏も、また鈴木氏と立場を同じくして、イギリス帝國を論じてゐる。矢口氏の著作は、イギリス帝國をコンモンウエルス・オブ・ネーションズと理解することによつて、その生成としての帝國主義を取扱つてゐる。第一章はイギリス帝國の構造およびイギリス帝國主義と題する九十數頁の長編であつて、靜態的に、イギリス帝國體制の構造を問題にし、コンモンウエルスの意義を明確にしてゐる。

第二章は、世界との交渉である。それが世界の歴史において、いかなる立場にあるかを問題とする。

第三章は、イギリス帝國および帝國主義の生成を問題とし、イギリスの帝國主義思潮と植民主義についての記述と、イギリスの領土的侵略の諸部面を、論じてゐる。

これらの諸部面を通じて、矢口氏の論述は、極めて平明であり、參考書も親切に掲げられてゐる。われわれは、イギリス帝國の生成と現狀とを、よく理解することが出來る。わが國においては、經濟史家の政治學者によつて、

イギリス本國のことは、研究されてゐるに拘らず、イギリスの帝國主義の部面に關しては多くの參考書を持たない現狀である。このときに當つて、矢口氏が、「イギリス帝國主義史論」を發表されたことは、われわれの感謝するところであり、わが學界の一方の缺陷を塡補するものであると信ずる。

たゞ、一言注文を出すならば、矢口氏の論述が、イギリスと他の關係において、甚だ簡略であることである。たとへば、北米におけるフランスとの鬪爭にしろ、またインドの經略におけるオランダ、フランスとの鬪爭は、詳細を盡して、頂きたかつたし、イギリス帝國主義史論といふからには、世界におけるイギリスの勢力範圍といはれてゐた領域における活動、殊に、その活動に際して、他の列强との競爭などについて、十分の記述が願ひたかつた。しかしながら、それは、囑望ともいふべきものだが、矢口氏の將來に十分期待し得るものであらう。

前號（第三十七卷三月號）目次

財政の源泉に關する考察……永田清

貨幣理論と經濟理論の結合……千種義人
——ミュルダール「貨幣的均衡」を中心として——

經濟學名著解題……高橋誠一郎
一千八百四十八年版ブルノー・ヒルデブラント著『現在及び將來の國民經濟學』第一卷

大量生產管理と統計的方法……寺尾琢磨
E・S・ピアーソン著石田保士・北川敏男譯

購讀料
一部　金五拾錢　郵稅金貳錢
半ヶ年分　金貳圓九拾錢　郵稅金拾貳錢　（停）
一ヶ年分　金五圓四拾錢　郵稅金貳拾四錢

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所へ
營業に關する用件は發賣所へ
原稿締切期日は發行前月十日

昭和十八年三月二十五日印刷納本
昭和十八年四月一日發行　毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十七卷第四號

編輯兼發行者　東京市芝區三田慶應義塾內　江田臨保
印刷者　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子活版所　（東京三三九四）

發行所　東京市芝區三田慶應義塾內　理財學會
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

購讀申込は慶應出版社へ（東京市芝區三田二ノ一）